

あらえびす賞

別れの先にあるものを感じて

神戸市立湊翔楠中学校 2年 稲永 聖怜

全ての出逢いには悲しみが伴う。出逢い、そして離れる。うまれたものはやがて衰え死んでいく。そんないずれくる別れを鮮烈に歌ったのが Officiant 髭男 ひげお の「アポトーシス」だ。最近になって髭男の曲をよく聴くようになり、元々メジャー曲は知っていたが、こんなにも歌詞が奥深く、心が癒される歌声だったのかと改めて惹かれた。アポトーシスの意味は細胞の自然死。そしてその語源はギリシャ語の「離れて」と「降りていく」から由来していて、枯れ葉が木から落ちるという意味もあるのだという。この意味を知った時は、これをタイトルにするとはなんてセンスなのだと感嘆の声をあげそうになった。この感動はこの曲を何度も聴いた後に味わえるものなのだろうなとも思ったし、ぜひともこの意味を念頭に置いてこの曲を聴いてもらいたい。初めてこの曲を聴いたとき、体の芯まで癒される歌声とメロディに私はどうしようもなく虜になったと同時に、こんなに美しい歌を知らなかったことに驚いた。秒針と命の鼓動でリズムを刻む旋律、新たな人生が肉付けされるがごとく増えていく音の重なり、なんて秀逸なのだろうとときめいたものだ。

「訪れるべき時が来た もしその時は悲しまないでダーリン」

「そう言った私の方こそ 怖くてたまらないけど」というフレーズが歌いだしにくるが、この曲の主人公は自分が死んでしまうことだけではなく、残された者のことまで考えて、気に病んでいるように読み取れた。私は自分の死が近づくときでさえ、残される者の気持ちを考えられるだろうか。そもそも私が「訪れるべき時」に残され、悲しむ者はいるのだろうか。そう信じられる存在はいるのだろうか。色々考えさせられる歌詞だが、残される者の存在を信じられる主人公はきっと、真に幸福な人生なのだろうなと思った。だからこそ、こんなに切実に歌えるのだろうか。私も、どんなに辛いことがあったとしても、信じられる人が一人でもいられたらいいと思う。

「さよならはいっしか 確実に近づく 校舎も駅も古びれていく 私達も

同じことだって ちゃんと分かっちゃいるよ」この歌で最も老いていくことの切なさを感じたのがこの歌詞だ。私はまだ十四歳。老いよりも成長、別れよりも出逢いを感じる初々しい時期だが、短い人生のなかでも、最も辛く咽び泣くほどの別れがあった。突然の転校だった。友達への感謝はもちろん、「またね」の一言すら言えず転校してしまったのだ。そのときまでの私は、別れなど頭の片隅にもなく、今というかけがえのない一瞬が永遠に続くと思っていた。だから、悲しみは計り知れなかった。そんな過去があった数ヶ月後に聴いたこの歌詞は優しく別れの悲しさを包み込み、別れとは避けては通れない過程、そんな現実を教えられることもなく突きつけられる人間の戸惑いさえ感じられる気がして、別れの必然さをまだ理解したくない自分を、責める必要はないと思えた。

髭男の歌詞の特徴は何かをかけて人の心情や生き様を表すことだ。例でいえば「Subtitle」なら雪で言葉を表現し、「ミックスナッツ」ならミックスナッツで産まれたときの不公平さや人間社会を表している。この曲もそんな髭男節がでている

「ロウソクの増えたケーキも 食べ切れる量は減り続けるし 吹き消した後で包まれたこの幸せが いつか終わってしまうなんて あんまりだって誰彼に 泣き縋りそうになるけど」というフレーズがある。誕生日の象徴であるケーキを軸に歳をとることの切なさを最大限に示しているこの歌詞に、鳥肌が立ってしまった。私もいずれこの歌詞に共感する日が来ると思うと思わず感傷に浸る。

この曲で二度でてくる

「今宵も鐘が鳴る方角は お祭りの後みたいに静まり返ってる」があるが、そもそも「鐘が鳴る方角」とは一体なんなのだろうと鐘について調べてみると、お寺にある鐘が意味合いとしてはこの曲に近いなと感じた。何故ならば、お寺で鐘は時刻を知らせるための時報として鳴らしていることがよくあるからだ。その鐘として後のフレーズの

「なるべく遠くへ行こうと 私達は焦る」

「焦りを薄め合うように 私達は祈る」を聴いてみると、なかなか信憑性が増して、歌詞の意味も分かった気がする。一番目のフレーズは、若さゆえ時

間の経過、自分の老いから目を背けようとするが、二番目のフレーズは、消失は必ずくると長い年月を経て気づき、ひたむきに祈る達観さが老いていくにつれての心の豊かさへと繋がっていることに気づく。

老いていくことは悲しいことだけではない。色々な価値観と出逢い、学び、自分を創りあげていく。人や景色、様々な存在に出逢うことはなんて素晴らしいのだろうと、当たり前であることの大切さに私はこの曲を通して思い知った。一生涯聴いていきたいと思える「アポトーシス」に出会えたことを誇りに思う。

曲名 アポトーシス
作詞・作曲 藤原 聡

あらえびす賞感想文について

稲永さんが経験された辛い別れ、自分の存在意義、そしてこれからの生きる方向性を、曲の旋律と旋律の重なりやリズムから感じ取られている、その瑞々しい感性に心打たれました。

審査員講評

一生涯聴いていきたいと思える一曲「アポトーシス」をこれからも大切にしていってほしいと思いますし、これから人生経験を積まれていく中で、自分を見つめ悩んだり葛藤することがあるかもしれません。そんなとき、希望の光となる音楽と出会えることを願っています。

教育長賞

わずかな違和感から

紫波第一中学校 3年 牛間木 佑斗

僕はある日、一つの曲に出会いました。その曲は夏をテーマとした楽曲となっていて、大体そのような曲は、とても爽やかな青春を感じられたり、目の前には壮大な海が広がっているような感覚に陥ったりする曲が多いと思います。もちろんこの曲も爽やかで夏を味わえる曲になっていますが、僕にはどこか、寂しげな雰囲気を感じました。他の曲と何が違うのか、僕はどうしても謎を解明したくなりました。

まずは流れてくる音に着目しました。すると、その中には楽器だけではない、いろいろな音が使われていました。エレキギター、アコースティックギター、ドラム、ピアノ、シンセサイザーなどに隠れ、ガラスコップに氷を入れるときになる、カランとした音、風鈴の音、蝉の鳴き声などが聞こえてきました。これらは夏の代名詞のようなものです。作者はこれらの音を入れて、夏を分かりやすく、クリアに表現したかったのでしょう。音に着目してみた結果、これらのことが分かりましたが、僕はこれ以外にも工夫が施されていると考えました。

次に着目したのは、一つ一つの音ではなく、全体のハーモニーや、音の聞かせ方です。この曲にはイントロがなく、すぐにAメロが来ます。そこでの伴奏は、エレキギターやドラムの目立った音がなく、ピアノ、アコースティックギター、風鈴の音、蝉の鳴き声など、きれいで繊細な音で主に構成されています。アコースティックギターの和風な音と、最近では気温の上昇や、クーラーの普及が広がって聞くことのなくなってしまった風鈴の音、山や森などの自然を感じさせてくれる蝉の鳴き声が重なって、ほかの曲にはない、爽やかでいて、暑くて涼しい、昔の夏の雰囲気を感じさせるものとなっています。

この曲を初めて聴いたときは、爽やかで、駆け抜けていくようなワクワク感などしか感じられませんでした。この曲を探求して、改めて聴いてみた結果、広大な森に囲まれ、自然であふれかえっている家の中で、庭を眺めて

いる、そういうぼんやりとした情景が頭の中を飽和しました。大人の階段を上るにつれて、忘れてしまった、はたまた心の奥の奥に閉ざしてしまった少年時代の感情を、この曲を通して、再び感じることができました。そして、もうあのころに戻れない、帰れないという何ともいえない感情から、最初に申し上げた通り、寂しさ、なつかしさを感じたのだと思います。

最初と最後でこんなにも印象がガラッと変わっている、こうさせたのはわずかに感じた、寂しさ、なつかしさ、たったこれだけです。そんなことで僕の印象はほぼ真逆にまで変わりました。僕はこれに気づいたとき、作者の技巧と音楽の可能性に言葉を失いました。わずかな違和感、それは音楽だけの話ではありません。日常生活で感じる、気にも留めなかった違和感、それを探求することで新たな出会い、気づき、学びを得られるかもしれない、これをこの曲で再確認しました。

曲名 夏の魔法
作詞・作曲 Luna

優秀賞

あなたは音楽をどうとらえる？

紫波第一中学校 2年 滝澤 翼

僕は歌が好きで気分転換のために、普段からよく聴く。その中でもミセスグリーンアップルの曲は、自分にとってとても重要な位置を占めている。

とある休日の日、お気に入りの曲である「僕のこと」を流していた。いつも通りのゆったりとしたメロディーだが、この日は少し違って耳に入ってきた。優しく寄り添ってくれているような歌声と、歌詞に込められた思いが自分の今と重なり、自然と涙がこぼれた。

先日吹奏楽コンクールの県大会が行われた。惜しくも銀賞という悔しい経験をした。僕は「これまでの努力に意味があったのだろうか、努力の仕方が間違っていたのだろうか」と悩み弱気のままではだめだと分かっていたても、気持ちをコントロールすることができなかった。そんな自分を慰めてくれたのが「僕のこと」だった。

この曲を最初に聴いたときは高音の声がすごいと感じていなかったが、目標が叶わなかった今となっては、そんな捉えがちっぽけに思え、この音楽に対する感じ方が変化していることに気付いた。音楽というものはその時々感情によって曲の捉え方が変わるものだ、という僕なりの答えを見つけた瞬間だった。そして、「勝つ者もいれば負ける者もいる。努力をしても報われないこともある。しかし、努力してきた事実がすごく美しく素晴らしいことなんだ」と、音楽から教えてもらった。歌詞の中に、「得ては失う日々意味はある。」という歌詞がある。例えば、コンクールの金賞を手に入れてもそこに至るまでの過程が、その賞にふさわしい練習だったのか、また惜しくも敗れたチームの気持ちを想像できていなければ人として大切なことを失っているのかもしれない。そう思うと悔しい経験も大事だと思える。これはあくまでも僕の感じ方であり、他の人はどのように解釈しているのかは分からない。

僕は広い視野で物事を捉えることが大切だと思っている。多様性が重視されている時代、それは音楽でも大切なことなのではないかと考えている。み

んながみんな同じ考えではないし、自分の考えがすべて正しいとは限らない。違う意見や感じ方を否定することはいけないことなんだと、音楽から教えてもらった。

多くのことに気づかせてくれたこの曲を作曲したのは、大森元貴さん。曲のサビに入った瞬間、まるで曇っていた空が晴れるような透き通った高音の響きに、自分の曇った心も前向きに歩いていこうと思わせてくれた。大森さんの曲は明るい曲がたくさんあって、きっと大森さん自身も同じように明るく生きていたのではないかと思っていた。ところが、中学校時代に登校できない時期があったそうだ。苦しい経験をしていたことを知り、またこの曲の感じ方が変わった。

同じ曲を聴いても気分や状況で捉え方が変わるものであり、聴く人が変わればまた捉え方が違う。どのように音楽を捉えていくかは自由でよいのではないかと、僕は考える。

曲名 僕のこと
作詞・作曲 大森 元貴